

「奉仕の理念」が世界を救う ～古典的職業奉仕論を超えて～

国際ロータリー第2840地区（群馬）

2013-14年度 ガバナー

本田 博己（前橋）

はじめに

この6月にガバナーの任期を終えたばかりの若輩ですが、伝統ある2580地区の職業奉仕セミナーでお話しする機会をいただき大変光栄に存じます。

「奉仕の理念が世界を救う」とはなんと大げさなタイトルか、と思われる方も多いと存じます。副題にある「古典的職業奉仕論」というのは敬愛する故佐藤千壽さんの表現をお借りしたのですが、それを「超える」とは、なんと傲慢なタイトルでしょう…。

私はこれまで錚々たる日本のシニアリーダーの方々が伝統的に語ってこられた「伝統的職業奉仕論」が間違っていると異を唱えるつもりはないのです。ただこれまでとは少し違った視点、具体的に言えば、ロータリーの理念が次第に定まっていたロータリーの創立時から1920年代にかけて初期のロータリアンが残した文献を、先入観を持たずに虚心坦懐に読み解きながら（彼らの使っていた言葉で）ロータリーの「奉仕の理念（理想）」を見直してみると、今までの（日本の）定説とは異なるロータリーの姿が見えてくる、そしてロータリーの新たな希望・可能性が見えてくるのではないかと考えるのです。

言葉というものは危ういものです。人を正しく導くこともできれば道を誤らせることもできます。心を動かすこともできれば惑わすこともできます。本日は、今まで語られてきた言葉に振り回されないで、初期のロータリアンの声にあらためて耳を傾けてみることから始めたいと思います。そして最後には、21世紀に生きる私たちにとってロータリー理念はどのような意味をもつのかという捉え直しができるか、と思っています。

『ロータリーの希望』

私は、昨年ガバナー月信に、ガバナーメッセージの他に毎号「ロータリーの誤解・正解」という連載コラムを執筆しました。ロータリーの理念・目的・原点・本質・歴史等々に関する日本のロータリアンの伝統的な議論の中には、「誤解」や根拠のない（典拠の不明な）臆見が見られます。ロータリーは、米国発祥で、公式文献の内容や解釈に疑義のある場合はすべて英語原典に基づくこと

になっています。英語の語義や概念と必ずしも一致しないことが多い日本語（邦訳）で、最初から最後まで議論する我々日本人は、ロータリーのグローバルスタンダードから見ればずいぶんおかしい議論をしているということもあるようです。

連載コラムでは、そうしたロータリーに関する「誤解」を明らかにし、ロータリー理解やロータリーの価値に対する私たちの認識が少しでも深まることができればと考えました。

年度の終わりに 12 回のコラムをまとめて PDF にしたときに、タイトルを「希望を語ろう！」という私の年度の地区スローガンを踏まえて『ロータリーの希望』としました。あまり体系的な意識もなく書き始めた連載でしたが、結果的に「奉仕の理念（理想）」に関する議論を中心としていたので、サブタイトルを～「奉仕の理念」とその実践をめぐる～とした次第です。今回のセミナーは、ひょんなことからこの PDF を見とがめた？ 鈴木富士雄 職業奉仕委員長からのご依頼によるものです。

この連載で、私は、「ロータリーの目的」と「五大奉仕部門」との関係、日本のロータリアンが語る「職業奉仕」と RI が示している「職業奉仕」の違い、「アイ・サーブ か ウイ・サーブか」という問題の立て方、ロータリーにおけるリーダーシップ、ロータリーの組織論、会社経営と「奉仕の理念」等々について、従来の議論とは少し違う新しい？ 切り口や見方を示しています。

本日はその全部をお話する時間はありません。本日の壮大（誇大？）なテーマに迫るための前提となる議論（それでも半分以上の時間を費やすことになるとは思いますが）だけとりあげます。私の話を聞いてずいぶんおかしいことを言うものだ、と思われた方は、この『ロータリーの希望』という 50 ページほどの拙文を、後で読んでいただければ幸いです。

(2840 地区ウェブサイト <http://www.rid2840.jp/> → 「過去の年度のページ」 → 「2013-2014 年 本田年度」に収録されています)

「奉仕の理念（理想）」の意味とは？

本日は、『ロータリーの希望』で論じたことから、「古典的職業奉仕論」を超える（という無謀な試みの）ために議論を一步進めたいと考えているのですが、その前に「奉仕の理念（理想）」を初期のロータリアンはどのように捉え、どのような意味で使っていたか、確認することから話を始めます。（「綱領」の改訳に伴い「奉仕の理想」が「奉仕の理念」に変更されたのですが、そのことに関する私の見解は『ロータリーの希望』で述べていますので省略します）

長年親しまれてきた「綱領」が「ロータリーの目的」に改訳されたのは日本のロータリアンの間では大事件でしたが、原文は 1951 年に今の形に定まって以

来、一切変更はありません。

「ロータリーの目的」の原文は“**Object of Rotary**”と単数で示されています。「目的」(旧・綱領)は一つなのです。4項目の前文のように見える最初の2行が、実は主文で、ここにロータリーの目的が端的に表現されています。すなわち「意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励しこれを育むこと」。これがロータリーの目的です。後に続く4項目は、主文の目的を達成するためにロータリアンが如何に行動・実践すべきかが書かれており、いわば主文の補足説明といってもよいでしょう。(「ロータリーの目的」の原文は4項目も含めて全体で一文となっています。)

強調しなければならないのは、ロータリーの目的は、この「**奉仕の理念**」を**奨励し育むこと**の1点であるということです。

「奉仕の理念」(The Ideal of Service)がロータリー理念の核心を示す言葉であるのなら、「奉仕の理念」の意味がわかれば、ロータリー理念の理解は容易になるはずですが、ところが、「奉仕の理念」の意味をきちんと説明したロータリーの文献がなかなか見当たらないのです。

これまで、RIの『公式名簿』(Official Directory)巻末に以前記されていたチェスレー・ペリーの言葉「全世界のロータリークラブは一つの基本理念 — 『奉仕の理念』を持っている。それは**他人のことを思いやり、他人の助けになること**である。(Rotary clubs everywhere have one basic ideal—the "Ideal of Service", which is **thoughtfulness of and helpfulness to others.**)」が「奉仕の理念」の意味を示した唯一の記述とされていました。そこで、「奉仕の理念」の意味を説明するとき、これまではこの言葉を引用する人が多かったのです。

『目標設定計画』に書かれた「奉仕の理念」の意味

ところが、ずっと古い文献、「奉仕の理念」という言葉がロータリーでキーワードとして盛んに使われ始めた頃に、「奉仕の理念」の意味を説明した記述を見つけました。

1931年にRIが発行した『目標設定計画』(The Aims and Objects Plan)という53ページほどのパンフレットです。(邦訳は東 昭二氏 訳の『目標設定プラン』があります)このパンフは1927年に決まった四大奉仕部門の意義と適用の方法を解説したもの(何度目かの改定版)です。

そのパンフの中で、「ロータリーでは、これまで“The Ideal of Service”の意味するところを様々な言い方で表してきた」として、以下の4つの言葉を列挙しています。(原文24ページ)

一つめは、「**超我の奉仕**」(Service Above Self)。二つめは、「**最も良く奉仕す**

る者、最も多く報いられる」(He Profits Most Who Serves Best)。三つめは、「他人への思いやり」(thoughtfulness of others)。四つめは、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(most of all treating others as one would like to be treated) という言葉です。

当時のロータリアンは、「奉仕の理念」(The Ideal of Service) を、以上4つの言葉を包含した意味に理解していました。あるいは、4つの言葉は、彼らにとって、「奉仕の理念」の内容を示す同意義の言葉であったともいえます。

三つめと四つめの言葉を先に解説しましょう。

「他人への思いやり」という言葉は、これまで多くの方が引用してきた『公式名簿』巻末のチェスレー・ペリーの言葉、「他人のことを思いやり、他人の助けになること」と同意だと考えてよいでしょう。

四つめの「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という言葉は、新約聖書の「マタイによる福音書7章12節」の通称「黄金律」と呼ばれる有名な一節です。この「黄金律」は1915年の「道德律」の末尾第11条や、後でご紹介しますが米山梅吉さんの文章など多くの初期ロータリーの文献で引用されています。同様な思想や表現は、キリスト教だけではなく世界中の宗教や古代思想の中にも見られます。

ロータリーのモットー（標語）

さて、一つめと二つめに戻ります。一つめと二つめ言葉は、それぞれ、ロータリーの第1モットー、第2モットーとして知られています。

第1モットーは、「超我の奉仕」“Service Above Self”。そして、第2モットーが、アーサー・フレデリック・シェルドンの言葉で知られる「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」“He Profits Most Who Serves Best”です。ここで重要なのは、初期のロータリアンが、この二つのモットーがともに「奉仕の理念」の意味を表していると認識していた、ということです。

この二つのモットーの日本語訳については、昔から議論がありました。特に、第1モットーの「超我の奉仕」は「超我」が造語でもあり、カッコよいが意味がよくわからない、といわれていました。日本のロータリーの創始者である米山梅吉さんは、これを「サービス第一、自己第二」とか「自己に先立つサービス」と訳しました。(米山梅吉さんは「サーヴィス」と表記しています)「超我の奉仕」より原義が伝わると思います。

第2モットーも、「最善のサービスをすれば、結果として最大の利益が得られる」とでも訳したほうがわかりやすいでしょう。

二つのモットーを一体化して捉える

初期のロータリアンは、二つのモットーを「奉仕の理念」の意味を示す同意義の言葉として理解し、二つのモットーを一体のもの（セット）として見ていたのです。

アーサー・シェルドンが1921年のエジンバラ大会で発表したスピーチ原稿（『ロータリーの哲学』）では、モットーを一つのモットー（a motto）として“Service Above Self — He Profits Most Who Serves Best”と一体化した形で示しており、ロータリーのサービス哲学の真髓を、この「一つのモットー」の中の“Service” “Self” “Profit”という3つの概念の本質とそれらの関係を説明することによって浮き彫りにしようとしています。

有名な「決議23-34」（1923年）でも同様に、この二つのモットーは、セットで示されています。

決議23-34 第1条

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」—の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践倫理の原理に基づくものである。

二つのモットーを全体として一つの主張として捉えると、ロータリーモットーの真意は次のようになると考えられます。

サービスを自己の利益や都合より優先させよう。

利益はサービスの結果である。

相手のために最善のサービスをすれば、結果として最大の金銭的な利益と、大きな精神的満足が得られる。

ここで主張されている思想こそ、「奉仕の理念」の核心です。そして、注意しなければならないのは、これは決して利益を求めて奉仕するという「功利主義」的な思想ではなく、他人のために役立つことが自らの幸せ（喜び）であるという、他人に奉仕すること自体を目的とする「利他主義」の思想だということです。「奉仕の理念」の究極のかたちとは、利己と利他の矛盾などない、利己と利他が完全に一致する状態だといえるでしょう。

「奉仕」(Service) とは何か？

さて、ここまで「奉仕の理念」の「奉仕」を、米山梅吉さんの訳にならって「サービス」とカタカナで表記してきました。本当は“Service”という英語で

示したかったのです。現代日本では「サービス」は、値引き、おまけ、無料など軽い意味で使われることが多いのですが、ロータリーでいうところの“Service”は、日本語の「奉仕」や「サービス」では伝えることのできない意味が含まれています。ロータリーが“Service”という言葉で示したかったのは何だったのでしょうか。

ロータリー独自の“Service”概念を提示したのが、アーサー・フレデリック・シェルドンです。シェルドンは、先にご紹介した『ロータリーの哲学』（1921年）というスピーチ原稿の中で、ロータリーの“Service”の意義を詳しく論じています。

シェルドンは「ロータリーの哲学は、“Service”の哲学である」と主張します。そして、“Service”と“Profit”とは、原因と結果の関係にある、と言います。“Service”があるから“Profit”が生じる。“Service”が先で、“Profit”はその結果である、と言うのです。

原因としての“Service”は、「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」で構成されており、一方、結果としての“Profit”は、仲間からの尊敬や自尊心の満足といった精神的な充実感と、物質的・金銭的な利益の両面を意味しています。

シェルドンの言葉は金銭的な利益を求める功利主義と誤解されることがあるのですが（特にイギリスのロータリアンから）、“Profit”が単に「金銭的な利益」を指しているのではないこと、利益は目的ではなく結果であることが、このスピーチ原稿を読むとよくわかります。

正しいビジネスの方法としての“Service”

それでは、シェルドンの言う“Service”の「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」とは、具体的には何を指しているのでしょうか。それは、「高い品質」「適正な価格」「豊富な品揃え」「経営者・従業員の適切な接客態度」「公正な広告」「豊富な商品知識、高度な専門知識」「十分なアフターサービス」といった、現代企業が顧客の信頼を得るのに必須の「サービス」と異なりません。

1927年、「四大奉仕」の枠組みが確立し、以来「職業奉仕委員会」と呼ばれるようになった前身の委員会は、“Business Method Committee”という名称で、アーサー・シェルドンがその初代委員長でした。当時、“Service”という言葉は、「**正しいビジネスの方法**」を示すロータリー理念の中核概念だったのです。

現代ロータリーにおける“Service”の意味

「職業奉仕」という言葉がロータリーで使われ始めた時も、ロータリーでは“Service”という言葉で、最も広い意味で使おうとしていました。（「目標設定

計画」パンフレット原文 23 ページ)

“Service” が正しいビジネスの方法を意味していたシェルドンの時代から、100 年後の現代では、ロータリーの“Service” の分野は広範囲に広がっています。1927 年に確立した「四大奉仕」は、2010 年には「青少年奉仕」を加えて「五大奉仕」となりました。1985 年から始まったポリオ・プラス・プログラムは、“END POLIO NOW” としてポリオ撲滅の最終局面を迎えています。2000 年代に入って、国際ロータリーは「戦略計画」を策定し、「人道的奉仕」の分野に重点を置く方向性を打ち出しています。2013 年からは、ロータリー財団の「未来の夢計画」も始まりました。

このような現代ロータリーにおいては、ロータリーのすべての奉仕部門を通じて、“Service” をその最も広い意味で使うようになっています。すなわち、

「人々の助けとなる、社会に役立つ価値を提供すること」

「世のため人のために尽くすこと」

ロータリーは、基本的に職業人の集まりですから、その“Service” は先ず自らの職業で発揮されることになります。自らの職業のサービスレベルを高め、社会に貢献できるよう努めることが、ロータリアンの最優先課題といってもよいでしょう。

それを「職業奉仕」と呼ぶのではないか、とおっしゃる方も多と思います。私はシェルドンの“Service” の哲学を説明するときに、注意深く「職業奉仕」という言葉を使いませんでした。その理由は後ほど申し上げます。

「奉仕の理念」と「ロータリーの目的」

ロータリーの「奉仕の理念」を私なりに要約すれば、世のため人のために自分もっている能力を全力で心をこめて捧げること、そうした利他の精神が自分の幸せにつながる、そして自分を活かす道である、ということです。

「ロータリーの目的」は、次のように言い換えることができます。

ロータリーの目的は、「奉仕の理念」を広め、その価値を高めてゆくことである。そして、理想のロータリアンとは、個人生活・職業生活・社会生活等、人生のすべての面で、「奉仕の理念」の研鑽と実践を行う人である、と言えます。

「職業奉仕」という言葉はいつできたのか？

さて、本日は「職業奉仕セミナー」です。過去、錚々たるシニアリーダーの方々の格調高い「古典的職業奉仕論」を聞きなれた皆様に、私の話がどのように受け止められているのか不安ですが、先ほどシェルドンを引用した時に「職業奉仕」という言葉をなぜ使わなかったのか、ご説明しなければなりません。

日本では、これまで、「職業奉仕」という言葉は強調されても、「超我の奉仕」や「奉仕の理念」はあまり語られてきませんでした。あるいは、図式的に、シェルドンの「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」というロータリーの第2モットーは「職業奉仕」を表明しており、第1モットーの「超我の奉仕」や「奉仕の理念」は人道的奉仕（や「社会奉仕」）を表明した言葉であると、二つのモットーを違う意味の言葉として説明されることもあったと思います。

しかし、先ほどご紹介したように、初期ロータリアンは、二つのモットーを同じ意味の言葉、すなわちロータリーの目的である「奉仕の理念」を意味する言葉だと理解していました。シェルドンの『ロータリーの哲学』（1921）でも二つのモットーは一つのモットー（a motto）として示され、決議23-34でもセットで示されていました。シェルドンがロータリーの“Service”の理念確立のためにリーダーシップを発揮した時代には、まだロータリーに「職業奉仕」（Vocational Service）という言葉は導入されていませんでした。

「奉仕部門」（Avenues of Service）の誕生

今から87年前に「四大奉仕（部門）」が確立したときの経緯を確認しておきましょう。

1927年、ベルギーのオステンド国際大会で「目標設定計画」（The Aims and Objects Plan）が採択されました。初期のロータリーにおいては、その活動は例会内と例会外に分類するだけですみましたが、活動が多岐にわたり複雑化するにつれ、奉仕プログラムを調和する必要がでてきました。クラブの管理運営を奉仕活動の実践に対応させ分類・整理する目的でつくられたのが「目標設定計画」です。

この計画を解説したパンフレットには「目標設定計画は、個々の会員に対してロータリーの理解を助け、日常の活動において奉仕の理念の適用を奨励し、且つ活動プログラムの調和を図ることを目的とする」と書かれています。

この計画の中で提示されたのが、「四大奉仕部門」（The Four Avenues of Service）に分類された委員会構成です。

実は、1927年オステンド大会では「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」の3部門（「三大奉仕」！）でしたが、翌年の1928年ミネアポリス大会で「国際奉仕」が追加され「四大奉仕部門」となったのです。

「目標設定計画」では、クラブの活動を「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」「国際奉仕」の4部門に分け、それぞれ委員会を編成します。これにより、クラブの組織と奉仕活動に整合性ができ、運営が円滑になりました。それ以後、この「四大奉仕部門」は、ロータリークラブの管理運営の基本的枠組みとして定着したのです。

最初から「四大奉仕部門」として確立していたのではなく、3部門から4部門になったこと、そして、もともとクラブ管理運営上の分類・枠組みであったことを考えれば、ロータリーの発展や変化に合わせてその枠組みが変わっていてもなんの不思議もありません。

2004年のRI理事会で決定されたクラブ・リーダーシップ・プラン（CLP）に基づく機能別の委員会構成が推奨され始めたころ、「四大奉仕があるのだからCLPなど必要ない！」という声が日本では多かったのですが、「四大奉仕部門」そのものが、87年前のCLPといってもよいのです。

「四大奉仕」から「五大奉仕」へ

2007年の規定審議会で、標準ロータリークラブ定款の第5条に、「四大奉仕部門」の定義が掲載されることになりました。そして、2010年の規定審議会で「青少年（新世代）奉仕」が第五の奉仕部門として加わり、「五大奉仕部門」となったわけです。

ロータリークラブが社会奉仕に熱心に取り組み始めた初期の頃から、ロータリーの青少年に対する関心は高いものがありました。

1927年のオステンド大会で決まった「社会奉仕委員会」の正式名称は“Community Service and Boys Work Committee”でした。標準的なクラブの組織図には、「社会奉仕委員会」の中に4つの小委員会があり、その内3つが青少年に対する奉仕の委員会でした。（「青少年委員会」「障害児童委員会」「育英基金委員会」）

また、『手続要覧』では、以前から（確認できた1950年版以降の版はすべて）「青少年に対する奉仕」（Service to Youth）は「社会奉仕」とは別の章立てで記述されていました。2010年規定審議会で「青少年（新世代）」が奉仕部門に加わったのは青少年奉仕の長い歴史を踏まえた現状追認と言ってもよいでしょう。

一つの奉仕部門としての「職業奉仕」

ロータリー理念の根底に「職業奉仕」を位置付ける日本の伝統的議論とは異なり、国際ロータリーが示す「職業奉仕」は五大奉仕部門の一つとしての「職業奉仕部門」なのです。

私が「職業奉仕」（Vocational Service）という言葉で、欧米のロータリアンと日本のロータリアンが全く異なる内容を語っていることをはっきり認識したのは、2012年バンコク国際大会の職業奉仕分科会に参加した時のことでした。

「職業奉仕」の分科会は英語での発表や討議でしたので、私がどこまで理解できたかは自信がないのですが、日本のロータリアンは、私たちにお馴染みの

「職業奉仕」の理念を熱心に語り、一方、欧米のロータリアンは、「職業奉仕部門」の、特にクラブでの活動実践事例を語り、両者は噛み合わないままに分科会は終わったのです。「同床異夢」という言葉が頭をよぎりました。

「五大奉仕部門」の定義が、国際ロータリー定款や細則には掲載されず、標準ロータリークラブ定款（第5条）にだけ示されているのは、それが、その前文で明記されている通り「個々のロータリークラブの活動のための枠組み」（framework for the work of this Rotary club）であるからです。そこには、ロータリークラブ会員が各奉仕部門で行うべき行動・活動が示されています。

第一部門の「クラブ奉仕」は「行動」（action）、第三部門の「社会奉仕」は「取り組み」（efforts）、第四部門の「国際奉仕」は「クラブの活動やプロジェクト」（club activities and projects）、第五部門の「青少年奉仕」は「活動」（activities）「プロジェクト」（projects）「プログラム」（programs）などという言葉で、具体的に会員やクラブの行動を求めています。

ところが、第二部門の「職業奉仕」は、記述が他の部門とは明らかに異質です。「奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うことが含まれる。」（『標準ロータリークラブ定款』第5条 五大奉仕部門 第2節）ここにはクラブの活動の枠組みであるはずの「奉仕の第二部門」としての説明が欠落しています。この記述が「誤解」の元となっているのです。

私は、かつて「四大奉仕」の中でも「職業奉仕」は、具体的な奉仕活動を求める他の奉仕部門とは違い、奉仕の理念の職業への適用を謳った「ロータリーの目的」の第2項目に通ずる、他の奉仕部門の上位概念のようなものではないかと思っていました。「四大奉仕」の一部門に収まっていることがおかしいと。

世界のロータリーが考える「職業奉仕」とは？

しかし、どうやら日本以外（？）の世界のロータリーでは、当然のように「職業奉仕」を他の奉仕と並ぶ、一つの奉仕部門（an Avenue of Service）として位置付けているようです。

例えば、2005年ごろから推奨されているクラブ・リーダーシップ・プラン（CLP）では、「職業奉仕委員会」は、5つに機能分類された委員会の一つ「奉仕プロジェクト」の中の1小委員会として、「社会奉仕」「国際奉仕」「青少年奉仕」の各委員会と並んで配置されています。このことに違和感を覚えた日本のロータリアンは多かったはずで

RI 発行の『職業奉仕入門』（255-JA(313)）という資料（『ロータリーの友』

2014年10月号に抜粋で紹介されている)があります。職業奉仕部門の活動の手引き書ですが、その「行動しよう」というコラムに実践方法や具体例が紹介されています。例えば、

- ・ **職業に関連する親睦活動グループに参加したり、新たにグループを設立する**：ロータリー親睦活動は、共通の趣味や職業を持つロータリアンとその配偶者、ローターアクターによる国際的な取り組みです。医師、法律・弁護士、出版関係など、親睦活動グループの種類は多岐に渡ります。
- ・ **奉仕プロジェクトで職業スキルを生かす**：科学・医学分野の専門知識、機械分野の専門スキル、ビジネスを始めるためのアドバイス、財務管理の専門知識、人前で話したり文を書いたりするスキルなど、職業を通じて培った専門能力を活用して、地域社会に貢献することができます。
- ・ **地域社会でロータリアン以外の職業人とのネットワークを広げる**：クラブでビジネス・ネットワークを広げる行事を行ったり、地域社会の職能団体の活動に参加したりしましょう。ネットワークを広げることで、会員候補者にクラブについて知ってもらえるだけでなく、専門知識や知り合いを広げることができます。
- ・ **求職者を対象としたキャリア相談を行う**：世界的な不景気にある今日、才能ある多くの人材が職を探しています。このような人々がスキルを高め、自信を持って職探しを行えるよう、地域社会で支援を提供しましょう。
- ・ **若者を対象とした進路指導を行う**：地元の高校の進路相談に参加したり、職業体験プログラムを実施したりしましょう。職業に関する知識を教えることで、若い人たちの視野が広がり、将来のキャリアをしっかりと選択できるようになるでしょう。地元のインターアクトやローターアクトクラブ、または学校との協力を検討してください。

もう一つ、『手続要覧』に載っている「職業奉仕月間」の解説を見てみましょう。(『2013年 手続要覧』89ページ)

職業奉仕月間 (Vocational Service Month)

毎年10月の「職業奉仕月間」は、クラブが職業奉仕の理念を日々、実践することを強調するための月間である。この月間中に推奨されるクラブ活動には、地区行事でのボランティアの表彰、ロータリー親睦活動への参加の推進、職業奉仕活動またはプロジェクトの実施、未充填の職業分類に焦点を当てた会員増強の推進などが含まれる(『ロータリー章典』8.030.3.)。

いかがでしょうか。『職業奉仕入門』の事例も職業奉仕月間の説明も、「こんなものは職業奉仕ではない!」という日本ロータリアンの声が聞こえてきそうです。地区やクラブの「職業奉仕委員会」の委員長や委員に任命された方は、

シニアリーダーが語ってきた職業奉仕論と RI が提示する職業奉仕とのあまりの違いに困惑したことがあるかも知れません。

しかし、世界のロータリーでは、自分の職業上のスキルを生かした奉仕活動は、個人が行うものであれ、クラブが行うものであれ、すべて立派な「職業奉仕」の活動として活発に実践されているのです。

「奉仕の理念」を語ろう！

日本のロータリアンと世界のロータリアンが語る「職業奉仕」が違うことを認識している方は多いかも知れません。ただ、その違いを、日本の「職業奉仕」理解の方が正しいとしたり、「職業奉仕」は他の奉仕部門とは違うとして、クラブの「職業奉仕」の実践を否定したりする態度は、間違っていると思います。

私の提案は、「職業奉仕」という言葉で「奉仕の理念」（の職業への適用）や自分の職業観を語ることをいったん止めてみたら、ということです。そして、クラブの活動のための枠組みである「五大奉仕部門」(Five Avenues of Service)の第二部門(second Avenue)である「職業奉仕部門」の活動だけに「職業奉仕」という言葉を使ってみたら、という提案です。

「職業奉仕」(Vocational Service)という言葉がロータリーで使われるようになったのは、1927年、ベルギーのオステン国際大会で「目標設定計画」(The Aims and Objects Plan)が採択され、「四大奉仕部門」がクラブの管理運営の基本的枠組みとなったときからというのは、何度も申し上げている通りです。

1921年以降ロータリーと距離を置くようになり、「職業奉仕」という言葉を知らなかった(?)アーサー・シェルドンの「Serviceの哲学」を「職業奉仕」で語ったり、“Vocational Service”という言葉から天職論や職業倫理を語ったりする議論は、もともと無理があるのではないのでしょうか。

シェルドンが語ったのは「Serviceの哲学」であり、ビジネスの正しい方法としての“Service”であったのです。

何度も引用する『目標設定計画』パンフレット(1931)の「職業奉仕」の章に“Vocational Service”の定義が載っています。“Vocational”は、名詞の“Vocation”から派生した言葉であり、“Vocation”は「正規の雇用(regular employment)、天職(calling)、事業(business)、専門職(profession)、仕事(occupation)などを意味する」と解説されています。

“Vocation”は「天職」(calling)だけではなく、職業の様々な側面を含めた一般的な「職業」を表す用法なのです。“Vocational Service”という言葉から、“calling”だけに注目し深遠な天職論を語ったり、そこに「職業奉仕」の本質を見たりするのは少し強引に思えます。

「意義ある事業の基礎」は「職業奉仕」を示している？

「職業奉仕」ではなく「奉仕の理念」がロータリーの中心的な言葉というのはわかった。しかし、「ロータリーの目的」は「意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、育むこと」と書いてある。「奉仕の理念」が「意義ある事業の基礎」ということは、やはり「職業奉仕」が根幹にあるということではないのか、と疑問を持たれた方もいらっしゃるでしょう。

確かに「ロータリーの目的」には、「奉仕の理念」は「意義ある事業の基礎として」(as a basis of worthy enterprise)と謳っています。英語の“enterprise”には「企画、企て (plan, project) ; 冒険的な計画、大仕事／企業、事業 ; 企業体、会社 (firm)」(研究社 新英和辞典)と様々な意味があります。英英辞典には「a company or business, often a small one / something new, difficult, or important that you do or try to do」(コウビルド英英辞典)とあります。

初期のロータリアンが比較的小規模の会社の事業主や専門職種の人々中心であった時代には、確かに「有益なビジネス・事業の基礎としての奉仕の理念」という認識であったかもしれません。

しかしその後「奉仕」“Service”の分野が広がり、“Service”をその最も広い意味で使うようになってきている現代のロータリーでは、“enterprise”は、個人の職業においてであれ、クラブやロータリー全体で行う「企て、企画、事業」であれ、「奉仕の理念」が基礎にあると考えた方がよいと思います。

実際、「奉仕の理念」という言葉は、「ロータリーの目的」の主文だけではなく、ロータリアンの生活全般にわたる奉仕実践を謳った第3項、国際理解、親善、平和の推進を謳った第4項にも出てきます。

第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、**奉仕の理念**を実践すること；

第4 **奉仕の理念**で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

「ロータリーの目的」(綱領)が今の形に定まって60年以上になりますが、その間文言の変更の必要がなかったのは、時代の変化や奉仕分野の拡大にも関わらず、「奉仕の理念」が私たち(ロータリアン個人とロータリークラブと世界的ネットワークである国際ロータリー)の「事業の基礎として」、そして最重要の行動基準として不変の価値と意義を持ち続けている証左ではないでしょうか。

日本の「職業奉仕論」は「職業倫理論」？

日本ロータリアンが得意な「職業奉仕論」は、世界では“(Vocational) Ethics”というテーマで論じられています。

初期のロータリアンが職業倫理の高揚を綱領(目的)に掲げていたのは紛れ

もない事実です。1915年に制定された「道德律」（「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」）は、多くの業界で職業倫理の向上に大きく寄与しました。ロータリーは初期のころから職業倫理を大事にし強調する集団だったのです。

しかし、これは当時存在しなかった「職業奉仕」という言葉を使わなくても十分説明できます。そして、現代においても「倫理」(Ethics)がロータリーの重要概念であることは世界共通の認識です。

これまでの日本の伝統的な「職業奉仕論」が間違っていると言っているのはありません。むしろ、日本のロータリアンの「奉仕の理念」や「職業倫理」に関する深い思索が、ロータリーの世界標準になればよいのに、とさえ思っています。

「職業奉仕」という言葉ではなく、「奉仕の理念（奉仕の理想）」(The Ideal of Service)という言葉で、ロータリーの理念についての議論を深めてゆこう、というのが私の提案の真意です。なぜなら、「ロータリーの目的」は、「意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むこと」であり、「奉仕の理念」がロータリーの根幹であるからです。

私は、この「奉仕の理念」をロータリーの根幹として議論を深めることを、戯れに“ロータリーの大統一理論”と呼んでいます。日本と世界のロータリーが真に共通認識をもって、「同床異夢」ではなく、共通の「希望」を語るができる日が来ることを願っています。

心ある日本ロータリーのシニアリーダーの皆様がこれまで培ってきた「職業奉仕論」を、「職業奉仕」という言葉ではなく、「奉仕の理念」という言葉で深めてゆくことが、日本ロータリーの世界標準化への近道であり、日本がロータリー世界に一層貢献する道であると信じています。

ロータリー理念を単純に考えよう

これまで日本のシニアリーダーたちは、ロータリーを難しく考え、難しく語り過ぎていたのではないのでしょうか。そうした言説に引きずられ、ひたすら「職業奉仕」を一義として、クラブの奉仕活動に参加することには消極的、そして、ロータリーが持っている他の豊饒な価値や社会に果たしてきた貢献に目を向けない「職業奉仕至上主義」（私が勝手に名付けているのですが）のベテラン会員がいます。私には、彼らが語る「職業奉仕論」は、現代人から見た後付けの理屈か、さもなければ単にその人の人生観・職業観の表明、あるいはロータリーで何も活動しないことの言い訳のように聞こえます。

初期のロータリアンが残した言葉を、先入観を持たずに辿ってゆけば、単純だが力強い、単純だが普遍的なロータリー理念の本質が見えてきます。

ポール・ハリスと同時代人（1868年の同じ年生まれ）であった米山梅吉さん

のロータリー理解はまことにシンプルでした。

ポール・ハリスの“**This Rotarian Age**”を米山さんが翻訳した『ロータリーの理想と友愛』の緒言（昭和11年3月）で、米山さんは、国際ロータリーの運動を「最も平明にしてかつ高尚なる主義精神に従える運動」と評しています。

別のところで、「ロータリーは結局常識である。拘泥する所がなく強制する所がない、自由寛容を希求する。ゆえに無邪気を喜び、笑って語るといふのがロータリーの風である。」と。（『国際ロータリーの精神』昭和14年（1939年）9月3日仙台中央放送局放送原稿）

昭和6年（1931年）3月28日台北ロータリークラブの創立を記念して、台北JFAK放送局というラジオ局で放送された米山さんの原稿も残されています。タイトルは『国際ロータリーの組織に就いて』。

その話の締めくくりに米山さんはこう語っています。「奉仕の理論と実行とを伝播して苟くも世間に空間なからしめんとするは是れロータリーの活動であります。而して夫れは『己れの為さんと望む如く人にも為せ』といふ古き平凡なる、併し久遠普遍なる黄金則に拠るのみであります。」と。「奉仕の理念」と同じ意味だと考えられていた黄金律がここでも引用されています。

初期のロータリアンが考えていたのは、そんなに難しい高尚な思想ではなかったのではないのでしょうか。最初のロータリークラブは、自由主義経済が過熱するシカゴで、どちらかと言えば弱者であった中小事業主たちがお互いの拠りどころを求めて結成されたといえます。彼らの生活実感に根ざした理念でなければ彼らの心をとらえることはなかったでしょう。

「奉仕の理念」を象徴する二つのモットーも、はじめは「サービスが先だよ、いいサービスをすれば儲かるよ、自分も他人も幸せになるよ。だからみんなで助け合おうよ」くらいの認識だったのではないのでしょうか。

このように、ロータリーの理念を単純に捉えることは、決して冒涇ではありません。崇高な理念の否定でもありません。ロータリー理念の原点は、彼らの生活に根ざしたまことに素朴な心情にあったのです。

原点としての「相互扶助」(Mutual Helpfulness)

初期のロータリーで、異業種の中小事業主たちであったクラブの会員同士が、お互いに商売の取引をして助け合っていたことを、私たちは「物質的相互扶助」という言葉で表現しています。そして「物質的相互扶助」から「精神的相互扶助」すなわち「職業奉仕」へ発展していった、というのが職業奉仕論者の描く図式です。

この「相互扶助」“**Mutual Helpfulness**”という言葉は初期のロータリアンがよく使う言葉でした。ポール・ハリスの“**This Rotarian Age**”（米山梅吉訳『ロ

ロータリーの理想と友愛』に次のように書かれています。

「相互扶助の観念 (the idea of mutual helpfulness) は、一般的な助け・役立ちの観念 (the idea of general helpfulness) にその席を譲った。それを端的に示すのが “service” という (ロータリー独自の) 言葉である。」(本田訳)

つまり、会員同士の助け合いから一般的な助け・役立ちへ広げてゆくキーワードが “Service” という言葉であった。「物質的相互扶助」から「精神的相互扶助」へ、ではなく、「相互扶助」に “Service” の観念が加わり「一般的な助け・役立ち」へ、すなわち「相互扶助」を外部へ拡張したのが、ロータリーの「奉仕の理念」に他なりません。

「超我の奉仕」“Service above Self” の原型とされているベンジャミン・フランクリン・コリンズ (ミネアポリス・ロータリークラブ) の “Service, not Self” はかつて「自己滅却の奉仕」とか「無私の奉仕」と訳されてきたような宗教的要素はなく、クラブの仲間同士の取引を外部にも広げようというくらい (「サービスだ、自分たちのためだけでなく」) の意味だと言うのは、コリンズのスピーチ原稿を発見した 2680 地区の田中 毅パストガバナーも指摘しているところです。

シェルドン作の第 2 モットーが最初に発表された 1910 年の年次大会では “He profits most who serves his fellows best” と “his fellows” という言葉が付いていました。翌年の大会では、“his fellows” が抜け落ちた今の形になるのですが、これは自分たちの仲間内や関係者に限定して適用される原則から、広く一般に通用する原則に修正されたということだと思います。

RI 事務総長のチェスレー・ペリーが、国際奉仕が「ロータリーの目的」(綱領)の一部となって間もない頃 (1921 年)、次のような言葉を残しています。

「協力と親善がこれほど必要とされることは今までになかった。利己主義と不信と恐れが蔓延すれば、災難が不可避の結果となる。世界の福祉のためには、より良い生活条件や健康状態の恩恵……を**相互扶助の精神**で万人の間で分かち合うことが必要だ」 (...be shared by all peoples in a **spirit of mutual helpfulness**) (『奉仕の一世紀』159 ページ)

相互扶助の精神

お互いに助け合う、お互いに分かち合うという、素朴ですが力強い「相互扶助の精神」は、20 世紀初頭の時代風潮 (加熱する自由主義経済) の中で、どちらかと言えば経済的・社会的弱者であった初期のロータリアン (中小事業主の集まり) の琴線に触れる思想であったようです。

ロータリーが誕生した頃の同世代人といってよいと思うのですが、アナキストの革命家として知られるピョートル・クロポトキンというロシア人 (1842 年～1921 年) がいます。革命家としての活動を終えた後、イギリスに亡命したク

クロポトキンは、ダーウィンの進化論を踏まえながら、『相互扶助論』(Mutual Aid 1902年)を執筆しています。(邦訳は、大杉 栄訳 同時代社)

クロポトキンは、ダーウィンの適者生存の原理を批判し、代わりに相互扶助の原理を進化の一要素として提示しています。

その著作の「結論」として、「個人的闘争をできるだけ少なくして、相互扶助の習慣をもっとも多く発達させている動物の種は、必ずその個体の数ももっとも多く、もっとも繁盛し、かつもっとも進歩に適している。」と述べ、「人類の道徳的進歩においては、相互闘争よりもこの相互扶助の方が主役を勤めていると断言することができる」と言い切っています。

邦訳の解説者、大窪一志氏は相互扶助の意義を次のように要約しています。

「他人のためにすることが自分のためにもなるという関係がおたがいに成り立っているような社会的関係がそこにはある。そして、そのような社会的関係のもとでは、「自分のため」＝利己と「他人のため」＝利他とが、対立しあわずに両立する局面が支配的になる。その関係は、相互主義 (mutualism) の関係である。この相互的自助、連帯しあう自助が相互扶助なのだ。」(邦訳 332 ページ)

そして、クロポトキンが主張するような歴史の底流に絶えず存在していた「相互扶助」は、現代では、「新しいタイプの協同組合や NPO、相互扶助・互酬型システムを備えたボランティア組織」などの様々なかたちで再生している、と指摘しています。

クロポトキンは別の論文(『アナキズムの道義』1898年)で、次のように言っています。

「他の者に対して、自分がその人と同じ状況のもとにあつたら、してもらいたいと思うことをしなさい。…この原則抜きには社会は存在せず、いかなる動物類・人間種族もかならず格闘しなければならない自然の障碍を克服することはできない。」(『相互扶助再論』大窪一志訳 同時代社 所収)

「同じ状況のもと」という限定した表現ですが、ここでも新約聖書「マタイによる福音書」の黄金律「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」が引用されています。黄金律がロータリアンの間だけではなく、欧米では宗教を超えた基本的なモラルとして定着していたことを示しています。

クロポトキンと同時代に誕生したロータリーですが、その原点と言ってよい「相互扶助の精神」は、「奉仕の理念」に形を変えて、現代にいたるまでロータリーの一貫した思想であったと思います。

ロータリーは常に「強者の論理」への異議申し立てでした。大企業資本主義、グローバル資本主義、新自由主義、市場原理型資本主義、金融資本主義等々の言葉で表わされる「強者の論理」に対するアンチテーゼ、異議申し立てであり

ました。(ロータリーは、運動論としては、ステータスやエスタブリッシュメントであってはならないのです。)

今からちょうど100年前の1914年に始まり1918年に終わった、ヨーロッパを主戦場にした第一次世界大戦(米国は1917年に参戦)は世界にとって大きな衝撃でした。第一次世界大戦の衝撃と教訓から国際連盟が設立され(1919年)、ロータリーでは「ロータリーの目的」(綱領)に「国際平和と親善の促進」が加わりました(1921年)。そして、そうした危難の時代に、先のチェスレー・ペリーの言葉のように、ロータリアンが大事に育ててきた「相互扶助の精神」が強調されたのです。

2011年3月11日の東日本大震災は現代日本人にとって大きな衝撃でした。原発事故も含めたあの災害は日本の運命を変えましたが、私の価値観や生き方、人生を変える大きな出来事でもありました。

福沢諭吉が『文明論之概略』(1875)の緒言で「恰も一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如く」と感慨をもらしています。自分の体は一つだが、明治維新の前後では、まるで違う二つの人生を生きているようだ、というのです。私も大震災のあの日以後、似た心境で過ごしています。

先日、統計数理研究所の「日本人の国民性 第13次全国調査」の結果が発表されました。調査によると、日本人の長所として「勤勉」「礼儀正しい」「親切」「心の豊かさ」等の項目が過去最高のスコアだったそうです。

また自分の周りの人が「他人の役に立とうとしている」とみている人は45%で、前回調査(2008年)より9ポイント上昇しました。(35年前の2.4倍)一方、「自分のことだけに気を配っている」と考える人は前回より9ポイント低下し42%と、「利他的」な回答が「利己的」な回答を逆転し上回った結果でした。同研究所は、「戦後社会が成熟するにつれ、ボランティアなどの公共性が高まってきた。…日本人が示した(東日本大震災)被災地のための行動が、今回の調査結果に色濃く反映されているようだ」と分析しています。(産経新聞 2014年10月30日)

私は、東日本大震災後に、日本全体で見られた相互扶助(被災者同士、そして日本だけでなく世界からの支援)や多くのロータリアンの様々な復興支援活動に、ロータリーのDNAといってもよい「相互扶助の精神」=「奉仕の理念」の可能性、私の表現でいえば「ロータリーの希望」を強く感じるのです。

「奉仕の理念」は深化・成長している

確固たる理念がその組織の方向性を定め、発展してゆく原動力となります。理念はころころと変わるようなものではありません。「不易流行」という言葉を使って、ロータリーの理念は不変だが、方法や奉仕実践の分野、組織運営のあ

り方は時代の要請に適うべく変化させてゆくものだ、とシニアリーダーが解説することがあります。

私もこの意見に概ね賛成ですが、ロータリーの「奉仕の理念」は、それが生まれた初期ロータリーの時代のままではありません。「奉仕の理念」は、100年の奉仕の実践を通して、喜びを体感したロータリアンの心の中で磨かれ深化していった。そして現在の私たちロータリアンの実践の中で一層深く、輝きを増し続けています。

私は、「奉仕の理念」は100年の奉仕実践を通して究極の利他主義に深化・成長したと考えています。「古典的職業奉仕論」の最も美質と思える、自らの職業（本業）を通じて社会貢献するという「職業奉仕」の理念も、「究極の利他主義」という視点からとらえ直すことができると考えているのですが、このことを詳しくご説明する時間が本日は残されていません。

ロータリーの「奉仕の理念」が、利己と利他の矛盾・葛藤を和らげる人生哲学から、利己と利他が完全に融合された究極の利他主義にまで達することができたのはなぜでしょうか。

ロータリーは決して宗教ではありませんが、積極的に参加すること、行動すること、実践することで、ある種の「啓示」や「悟り」の瞬間が訪れることがあります。田中作次 RI 元会長が提示した「ロータリーモメント」（心に残るロータリーの感動体験）もそういう瞬間を表現したものと言えるでしょう。

昨年1月に米国サンディエゴで開催された国際協議会（ガバナーエレクトの研修会合）では、私たち同期のガバナーエレクトもワークショップでそれぞれの「ロータリーモメント」を発表する機会がありました。

当時のロン・D. バートン RI 会長エレクトは、「ロータリーモメント」を、「ロータリーに打ち込むきっかけとなる何かをロータリーで見つけた体験」と言い換えています。ワークショップの機会に「私がロータリーに打ち込むきっかけとなった体験は何だったか？」と列挙してみると、八つの体験が思い浮かびました。「ロータリーモメント」の“Moment”という語は「決定的瞬間」という意味でしょうが、私の体験は、文字通りの「瞬間」であることも、そのことに取り組んだ長期間の経験であることもありました。そして、八つの体験は3種類に分類されます。

第一は、クラブでの役職の経験を通しての体験です。入会して3年目に副幹事、5年目に幹事、その後、いくつかの委員長や理事の経験の後、入会14年目にクラブ会長を務めました。その時々で、ロータリー理解に関する私なりの「発見」があり、またクラブ会員の皆様との交友の広がりや深まりを味わいました。

第二は、地区での地区副幹事やいくつかの委員会委員長、地区研修委員など

の役職の経験を重ねる度に得られた、ロータリーの諸課題に対する視野の広がり、地区のシニアリーダーはじめ全国の尊敬すべきロータリアンとの出会いです。

そして、第三は、クラブや地区のロータリアン仲間とともに取り組んだ、新しい企画立案や奉仕プロジェクトの立ち上げ、そして一連の組織改革の推進の体験です。特に、この「仲間とともに取り組んだ」体験が、八つの体験のうち五つを占めています。ロータリーの中核的価値観のひとつ“Fellowship”（「親睦」）は、まさに「仲間とともに取り組む」ことを通じて育まれるものだ実感したものです。

ロータリー100年の歴史の中で、仲間と共に奉仕する喜びを体感した数多のロータリアンがいます。彼らの味わった奉仕することで得られた充実感、自己成長感、自己実現感、そしてロータリーの仲間との連帯感が、「奉仕の理念」の意味を磨き深めていったのです。

数多のロータリアンによる奉仕の実践の積み重ねによって、「奉仕の理念」という人生哲学は、他者のために尽くすことが即、自らの幸せ（喜び）になるという究極の利他主義にまで成長していったといえるのではないのでしょうか。

もちろん、ロータリーの「奉仕の理念」の核心には最初から「利他の心」がありました。「相互扶助の精神」はまさに利他的な助け合い・分かち合いの精神です。

ポール・ハリスは、当時の機関誌「ナショナル・ロータリアン」の1912年7月号に「人生訓」“*Life's Lesson*”という文章を寄稿しています。その中で、ポールは、「生きる目的は何か」と自問し「学ぶこと」だと答えています。そして、「何を学ぶために生きているのか」と問い「自己にとらわれないようになること」「自我との決別」を学ぶ、と自答しています。（ポール・ハリス語録『過ぎし時に敬意を表して』）

利己から利他へ至る道は、当時も今も困難な学びの道です。私たちロータリアンは、ロータリーに積極的に参加する中で「奉仕の理念」に導かれて、「利他の心」を学びます。そして、それはロータリーのDNAである「相互扶助の精神」を思い起こすことでもあるのです。

「奉仕の理念」は私たちにとって何を意味するか？

『目標設定計画』（1931）の中で、「奉仕の理念」（奉仕の理想）は私たち個人にとって何を意味するか？という問いが、最後に投げかけられています。

「職業奉仕も含めて『奉仕の理念』の解釈は意図的にロータリアン各自およびロータリアンのグループに任されている。その適用は広範で多様な状況、問題、可能性に対応して実行されなければならない。**ロータリアン個人が“私の**

職業を通じて『奉仕の理念』を適用するとは自分にとって何を意味するのか？” という問いに自ら答えることができなくてはならない。」

私たち日本ロータリアンは、これまでそれぞれ思い思いの「職業奉仕」を語ってきましたが、これからは、それぞれの「奉仕の理念」論を語り合うことが大事ではないでしょうか。

私たちがロータリアンであるとは、一つの生き方を選択したということだと思います。ロータリーの「奉仕の理念」は、どこか遠くにあって仰ぎ見るものではなく、自分の個人生活・職業生活・社会生活の中に実現すべきものでしょう。そして「奉仕の理念」は、職業人であるロータリアンの拠りどころとなる実践的な人生哲学でもあります。ロータリーの「奉仕の理念」の実践が、社会の中で自分を活かす道であり、社会をよい方向に導く強い力をもっていることを私たちはもっと信じてよいのではないのでしょうか。

発信力のある日本ロータリーを

最後に、本日お話しした「職業奉仕」という言葉に対する認識のギャップに見られるような、現在の日本ロータリーと国際ロータリーとの相互無理解、相互不信？という不幸な関係について触れざるを得ません。

日本ロータリーは、世界全体のロータリー運動の中で、影響力の低下や価値観・方向性の認識における世界とのずれが解消できずにいます。RIの方向性や現状に疑問や不満を感じる日本のロータリアンも増えており、このまま意識のギャップが拡大してゆけば、日本のロータリーがロータリー世界の中で孤立化してゆくことが懸念されます。

6年後の2020年は、東京ロータリークラブが設立されてちょうど100年という節目の年を迎えます。この日本ロータリー100周年を私たちはどのように迎えるか、が今問われているのではないのでしょうか。

国際ロータリーの方向性（戦略計画、未来の夢計画）に背を向けて日本独自の孤立路線を歩むのか、それとも世界的ネットワークの重要な一員として、理念と活動の両面で21世紀のロータリー運動にリーダーシップを発揮できるようになるのか、二つの道のどちらに向かおうとしているのか、大きな岐路にあるのではないのでしょうか。

私は、「古典的職業奉仕論」で培ってきた日本のロータリアンの深い智慧を、共通言語の「奉仕の理念」で世界に発信してゆくことが重要だと考えています。一方的な発信ではなく、世界のロータリーとの対話を通して、ロータリーの「奉仕の理念」とその実践についてのロータリー世界の共通認識を醸成してゆく姿勢が必要です。

日本がロータリー世界でリーダーシップを発揮するには、もっと世界に対す

る発信力を高めてゆかなければなりません。(これはロータリーだけではなく、政治・文化・経済の分野に関しても言えることかも知れませんが)

例えば、3年に1度世界の全地区から代表議員が集う「規定審議会」(Council on Legislation)という国際会合があります。規定審議会は国際ロータリーの唯一の立法機関で、国際ロータリー定款、細則、標準ロータリークラブ定款というロータリーの組織規定を改正する重要な機会となっています。

立法案は、クラブや地区単位で提案することができます。つまり、私たちの提案で、ロータリーを変えてゆくことができる、ということです。規定審議会は世界のロータリーの縮図です。ロータリー世界といっても考え方は一様ではありません。日本では考えられない様な(変な?)提案をする国もあります。

皆さんもロータリーの様々な現行の規約に疑問を持たれたことがあるかも知れませんが、しかし、規定審議会に立法案を提出し世界各地の代表議員の賛同を得ることができれば、規約を変えることができるのです。今回は2016年開催で、地区からの立法案提出締切は今年末ですが、毎回日本からの提案は残念ながら少なくて少ないのです。(1地区5件まで提案できるのですが)

規定審議会は、日本のロータリアンが何を考えているか世界に発信できる大事な機会です。日本の存在感を高めてゆくためにも、立法案を通じてロータリー世界にもっと日本の主張・意見を発信してゆく必要があるのではないのでしょうか。

現在、2020年に向けて『ロータリー日本100年史』の編纂準備委員会が活動しています。2020年は、『100年史』の発刊というだけではなく、今後の日本ロータリーの方向性を定めてゆくためにも大きな節目の年になると思います。日本ロータリーのビジョン・戦略計画を世界に向けて宣言・発信する絶好の機会ではないのでしょうか。

おわりに 「奉仕の理念」は世界を救えるか？

この講演を締めくくるに当たり、私の個人的なロータリー理念の学びの歴史を申し上げます。

私は、入会して2～3年は、多忙を理由に例会やクラブ行事には欠席しがちな不熱心な会員でした。クラブの役職(幹事や委員長職)を拝命する毎に、ロータリーのにわか勉強をしながら、次第にロータリーの奥深さや魅力を感じるようになりました。

「職業奉仕」論もクラブの「職業奉仕委員会委員長」を務めた時に、田中毅さんのシェルドン研究や深川純一さんの天職論などに大いに啓発されました。特にシェルドンの主張する“Service”の概念が、私が普段実践しようとしている経営観と完全に一致していると気がついた時が、私のロータリーモメントの

一つといってもよいのです。ロータリーの仲間とともに、ロータリーの「奉仕の理念」をより深く学び実践してゆくことが、経営者としての成長にもつながるに違いないと、その時確信できたのです。

その後も日本ロータリーの精華ともいえる「古典的職業奉仕論」に親しんできましたが、中でもビジネスマンの私に一番得心がいったのは故 佐藤千壽さんの諸著作です。

私は、職業分類は「乳製品販売」、群馬でヤクルトの販売会社の経営をやっている「ヤクルトおじさん」ですが、前職で英和辞典や国語辞典の編集者を生業としていました。ロータリーは米国発祥で英語が原典となっていますので、普段私たち日本のロータリアンは日本語の翻訳でロータリーを理解しています。ところが、言語の系統が異なる日本語は英語の語義や概念と必ずしも一致しないことが多いので、首を傾げるような日本語訳（単語でも文章でも）が多いことが次第に気になってきました。

そうした日本語訳への違和感から、原典の英語、特に初期のロータリアンが使っていた言葉や思いに寄り添って考えてみると、本日お話ししてきたような新たな視点（と自分では思っているのですが）が得られてきた、という次第です。職業奉仕は難しいか？難しく語り過ぎていただけではないのか、というのが私の率直な感想です。

「奉仕の理念が世界を救う」というタイトルはやはり誇大でした。しかし、「奉仕の理念」を私たちがこれからも大事に守り育ててゆき、それぞれの人生やロータリー運動の中で実践してゆけば、世界を救う可能性と希望が見えてくることは信じてよいのではないのでしょうか。

最初に言葉は危ういものだと申しましたが、私は言葉の持つ力を信じています。私たちが、正しく問い正しく考えることを怠らなければ、ロータリーという言葉は、これからも私たちにより良く生きる力を齎し続けるでしょう。

ガバナー職を務めながら、推敲を重ねる余裕がなく執筆した『ロータリーの希望』では十分示すことができなかつた部分について踏み込んで論じる機会をいただき感謝しています。

つたない話を最後までご清聴いただきありがとうございました。

主な参考文献

- 『目標設定計画』 (*The Aims and Objects Plan*) RI 発行 1931
(邦訳『目標設定プラン』東 昭二氏 訳)
- 『ロータリーの哲学』 (*Philosophy of Rotary*) アーサー・F・シェルトン 1921
“*This Rotarian Age*” ポール・ハリス 1935
(邦訳『ロータリーの理想と友愛』米山梅吉訳)
- 『過ぎし時に敬意を表して— ポール・ハリス語録』 RI 発行
- 『国際ロータリーの組織に就いて』他 米山梅吉 1931
- 『奉仕の一世紀』 (*A Century of Service*) デイビッド C.フォワード 2003
- 『相互扶助論』 (*Mutual Aid*) ヒョートル・クロボトキン 1902 大杉 栄訳 同時代社
- 『相互扶助再論』ヒョートル・クロボトキン 大窪一志訳 2012 同時代社
- 『職業奉仕入門』(255-JA(313)) RI 発行
- 『2013年 手続要覧』 (*MANUAL OF PROCEDURE*)
- 『源流の会』のウェブサイト <http://genryu.org/> のアーカイブス
- 『ロータリーの希望～「奉仕の理念」とその実践をめぐって～』 本田博己 2014